

うたごよみ 曾於文藝

「題字」

本妻文化協会會員
瀬戸口 淳 氏

俳句

千草俳句会

冬枯の大樹凜と園広し

千田 茂子

青空を映し広き冬の池

児玉 タエ子

日を集め池に映れる冬もみじ

田之上 千代子

大隅俳句会

若水の龍の口より逆る

河南 ミホ

古民家に赤き車の小正月

岩重 みどり

ひとり身や招き招かれ松の内

川崎 綾子

短歌

末吉短歌会

「おいしいー！」笑顔はじける

給食はふるさと地産の食育ならむ

小野 清子

語彙力の失はれゆく母なれば

大森 澄子

声を枯らすまで話を聞かう

宝蔵 弘二

身を削ること知りつつ深酒

宝蔵 弘二

余命三月と娘に告ぐること決意

鮫島 由美子

このときを豊かに満ちくる潮

広川 みどり

かな凍れる空に月のぼりくる

広川 みどり

旧姓を小さくペンで書き添え

し喪中のはがきはるばる届く

米沢 正敬

財部短歌会

墓参の道川面をはしる北風が心
ふきぬけ師走となりぬ

井上 澄子

朝霧の全景を包みわれひとり黄
泉の世界へ入り込むごとし

祝迫 道雄

田も畑も要らぬと子どもは言ひ
放つ予期せぬ言葉に耳を疑ふ

児玉 次雄

ふるさとの父母逝きてはや五年
経つうから集ひて偲ぶ冬の日

杉村 リカ

和気公や龍馬茂吉もおとずれし
もみぢ望めて妙見温泉

橋口 貞男

夕日浴びひらり舞ひ散る銀香の
葉しみじみとして秋深まりぬ

富山 治雄

東へと雲の羊を追ひ集め疾き風
立ちぬ陽も斜めにて

山城 忠

花もまた其の散り際の様々に花
弁散らすあり花房おとすあり

瀬戸口 芳子

今日の雲形は二度となきゆえに
秋の夕日に染まり消えゆく

川俣 若

薩摩狂句

にがごい会末吉支部

仕事疲れ 晩は熟睡 夢んなか

浜田 一好

若け時の 夢あ叶わじ 七十坂

田代 勝泉

こら恥ね 半端挨拶の 人違げ

鈴木 一泉

軽り声で 挨拶が弾ん

南川 句句

大隅薩摩狂句会

頃を見て横杵ん傍は

座を外じつ

山田 竜生

寝惚け顔れ年頭客どみ狼狽ろつ

西山 美代子

寒か晩 小便起きいな 洩るつ

黒木 義士

賀状一枚 昔の友しと 続つ仲

福元 多喜子